

比較言語学と比較神話学¹⁾

その 1

河崎 靖

目次

序

- I. 日本神話と神話学 (以上、今回の原稿)
- II. 日本神話と印欧神話 (次回の方稿)
- III. 印欧語比較神話学 (以下、次々回の方稿)

序

今この世界にいるという存在意義、生死の意味に関わる問題に対して、然るべく人を説得し、共同体もしくは社会の安定を保証する役割を果たしてくれるものの一つが神話である。始原の時よりのこの世のあり方について問いかけ、この問いに応えてくれる神話は、古代の人たちには一種のモデルのように機能していたのであろう。かくして神話は語り継がれるべく存在し続けるのである。まさに「神話というのは、いま、ここに生きてあることの根拠を語る」(三浦 2003:19) ものである²⁾。

このような神話の比較を本格的に行ったのがフランスの神話学者デュメジルである。このデュメジルについて注目すべきは、彼が必ずしも最古の神話を研究対象とはしていないことである。すなわち、デュメジルによって、比較神話学は、当時、当然の如く考えられていた比較言語学の延長線上にあるものとしての地位からいわば独立したことになると言える。デュ

メジルが行った、比較神話学の比較言語学からの独立宣言とは次のようなものである。ヴェーダやホメロスは確かに言語的に見れば最古の資料であるが、しかしながら、古い神話のテーマの残存は資料の年代とは必ずしも合致しない。比較神話学では古い資料が必ずしも最善ではない。こうして、言語の古さという基準から逃れることで、言語学では軽視されてきた資料まで含めた、より広い展望を手に入れることができる。また、デュメジルはラテン・ゲルマン・ケルト・スラヴなどの資料の方を重視するが、それは、これらの社会は、インド・イラン・ギリシアに比して文明化が遅れたので、たとえ資料の年代が新しくとも、インド・ヨーロッパ語族の観念をより忠実に保持しているという理由からである。よって、資料の相対年代・ジャンルへの偏見のなさが、比較言語学にはないデュメジル流の比較神話学の特徴である³⁾。その根拠となるのは、インド・ヨーロッパ語族についての最古の諸証言からは分裂前の状態は再建できず、古い資料が残っているのは知的努力が早くから見られた文明社会であるということである。すべての口承伝承は非常に緩慢に姿を変えていくし、それは秩序立ったものではない。しかし、文明社会の資料はそうした単純な進化をとげない。文明社会では成熟化があらゆる面に及ぶので、資料はすでに改訂され、再考され、場合によっては背景に追いやられた形でしか残らない。歴史はその第一歩からすでに、バラモンの神秘主義やゾロアスターの道德主義、そして「ギリシアの奇跡」に直面するのである⁴⁾。さらに、デュメジルはインド・ヨーロッパ圏の神話の比較から、伝承圏という概念を提唱した。それは、アンブロシア伝承圏と呼ばれる、不死の飲料を巡る神々とその敵対者の争い、それをあらわす神話と儀礼のセットに代表される。これは、印欧語族に特有の神話のタイプなのだと考えられる。デュメジルは神話と儀礼を同地位のものと捉え、両者の複合を探し、そのための重要な証拠としての語源に一致を探求しようとした。

ところで、日本人はどのような世界観をもっていたのか、それは、『記紀』の神話を見るとわかる。どうやら世界は三構造をなしていたらしい。^{たかまがはら}高天原という天があって、地下に根の国があり、高天原と根の国の中間に葦原の中つ国がある。魂が天上から地上の国、すなわち中つ国にやってくる。しばらく経って死んで、また天上へ帰っていくものもあれば、地下へ行って押し込められるものの二種がある。霊というのは、復活したいという願望があるので、できるだけ天上へ帰っていこうとする。地下へ行って永遠に地下に押し込められることのないようにする性格がある⁵⁾。こうした三世界構造の認識が『古事記』あたりから感じられる。こうして、現実世界の中には、いつも、神の国から来た人間と、根の国から来た人間が混ざり合っている⁶⁾。日本人の深層にある異界からのイメージを動物で例えて言うならば、天界と結び付くのは鳥であり、根の国の使いはヘビである。以下では、まず、比較神話学の構想のもと、日本神話の特性を浮かび上がらせることを目的に、『記紀』を中心的な素材にして日本の神話および神話学の現況について論じることから始めたい。

I. 日本神話と神話学

1-1.

神話には、ある民族が過去に経験した事実が秘められている。それは、歴史的な事象だけではなく、その民族の心と夢が投影されている。例えて言うならば、日本神話において、日本人の心情は他の民族とは異なるものとして描かれているといった具合である。一例で言えば、その世界観においても、日本神話では、神は人間になることができ、人間もまた神になれるという見方がなされる。これは、キリスト教文化とは異なるものである。日本神話の著しい特徴として挙げられるものとして⁷⁾、禊ぎ（みそぎ：アマ

テラスはミソギによって生まれる)がある。他の国の建国神話には見られないものである。イザナギは死の国へ行き穢れたので身をすすぐ。このミソギにより、最も重要な神々であるアマテラス・スサノオ・ツクヨミが生まれる。クニトコタチノカミをはじめとする自然生成の神々、あるいはイザナギ・イザナミという国土・人間の生産に結びつく神々は決定的な支配神になることができず、その後の時代に初めて、すなわち、ミソギによってのみ、国家支配の神が生じる⁸⁾。

ところで、神々が単独で人間と関わらず戦っていたわけではない。神々は、人間の、主として氏族の利害と結びつき、神々の戦いは同時に氏族の戦いであった⁹⁾。ホメロスの『イーリアス』においても、神々の世界と人間の世界は、一応独立しつつ、密接な因果関係をもっている。人間の世界に戦いが起こる。Aの種族とBの種族との間の戦いである。それと同時に、神々の世界でも、Aの種族の奉じる神々とBの種族の奉じる神々のとの間に戦いが起こる。Aの種族の神々がBの種族の神々に勝つと、その結果、Aの種族がBの種族に勝つ。つまり、神々の戦いは人間の戦いの前に行われ、人間の戦いの命運を決定する¹⁰⁾。

片や、世界神話には、個々の民族の神話を通底するような共通した筋書きや型（パターン）がある。例えば、創世神話・国生み神話・始祖降臨神話・日蝕神話・五穀起源神話・食物神殺害神話・隠れ里説話・呪的遁走型説話・釣針喪失説話・末子成功譚・霊泉譚・大樹伝説などである。ここですでに、いわゆる口承文学のカテゴリーのあり方を検討し直す必要に迫られる。神話・説話・伝説の類は、もともと古代人が自らの豊かな想像力を描き記し、それを口頭で語ったものである。すなわち、さまざまな出来事を神々の活動を中心に解釈し説明したものが神話であり、理想的な英雄を軸に話が展開されれば伝説とみなされるし、また、話そのものにウェイトがおかれ神話や伝説に見られる信仰的な要素が失われているものが説話と

考えられる。もっとも、これら古伝承の区分は容易ではなく、ひとまとめに解する傾向がある¹¹⁾。

1-2.

『古事記』・『日本書紀』に関する研究の歴史は古い。今日なお、神話学・宗教学・考古学・歴史学・民族学・言語学など多方面から分析、解説がなされている。戦前の皇国史観に対する反動により、『記紀』に記述された神話の部分には一切、歴史性はないと考えられるに至ったのは自然ななりゆきではある。確かに、『記紀』の記述を全くの史実だと鵜呑みにすることはできない。ただ、比較神話学的に見れば、世界の神話で、実際の事跡を伝えている事例は多数存在し、また『記紀』における神代の部分は地名（九州・出雲）も含め具体的な記述が多く、『記紀』に伝承される神話は日本の古代に起きた何らかの史実を伝えている可能性が高い¹²⁾。

例えば次に引く伝承もまた、『記紀』が単なる創作ではなく、生き生きと史実を描かんとする姿勢が見てとれる箇所と言えよう。ここでは、本居宣長の『古事記伝』巻十にある熊野に関する描写を挙げる（「凡て熊某と云は、^{クマナニ}みな猛^{タケキ}を云る例なること」『古事記伝』（三） 岩波文庫 67頁）¹³⁾。この熊野は、『日本書紀』においてイザナミノミコトの葬られた場所として登場してくるのであるが、現在の三重県熊野市有馬町に「花の窟（いわや）」というところがあり、ここがイザナミノミコトと火の神カグツチの墓所とされている¹⁴⁾。一書日伊弉冉尊火神を生み給う時に灼かれて神退去ましね故れ紀伊国熊野の有馬村に葬しまつる^{かく}土俗此神の魂^{くにびと}を祭るには花の時に花を以て祭る又鼓吹幡旗^{つづみふえはた}を用て歌い舞いて祭る」

花の窟神社の祭神、イザナミはこの神社から西へ1.5キロ行ったところにある産田^{うみだ}神社の地でカグツチを産んだと言われている。毎年、2月2日・10月

2日に、今日まで連綿とこの『日本書記』に記されていることそのままに「花の窟神社大祭」という神事が行われ続けている¹⁵⁾。この神社には古来、社殿がなく、高さ45メートルの石の巖壁が南向きにあり、その正面に壇を作り、玉垣が囲む拝所が設けられている。花の窟神社には宣長も次の歌を寄せている¹⁶⁾。

紀の国や 花窟にひく縄の ながき世絶えぬ 里の神わざ

ただし、『古事記伝』巻十の中、宣長が熊野と出雲の関係を論じている点は、歴史学的に考えてみるに、疑問符が付けられねばならないのではなかろうか。論点は、すなわち、紀伊の国の熊野と、出雲の国の中にある熊野とで、少なからぬ地名が共通することの理由を、古い時代に出雲族の一部が、その出雲国より紀伊の熊野へ渡来移住した所以だとする考え方の妥当性に関してである。確かに、熊野三山の一つ、速玉神社と同名の神社が出雲国意宇郡にもあること、あるいは、同所に韓国伊達神社からくにいたてがあるのに対して、やはり紀伊国名草郡にも伊達神社があり、また、出雲の国大原郡に加多神社がある一方、紀伊の国名草郡にも加太神社がある等、同名の社が多いことは事実である。しかしながら、熊野の地名の起源は出雲にあるとし、熊野は出雲族により開かれた土地であると説く宣長の学説が十分な論証をもった説かどうか、明確なことは現在でも言い切れない。もっとも、この説は代々受け継がれ、明治時代以降でも唱えられ続けるいわば伝統的な学説なのである。以下に宣長の考えるところを記す¹⁷⁾。

出雲と木ノ國と、同く通へること多し。まづ伊邪那美ノ命をば、伯伎の堺なる比婆之山に葬奉ルとあると、紀伊ノ國熊野之有馬ノ村に葬奉ルと同事、又熊野てふ地ノ名も、二國にあり。また意宇ノ郡速玉ノ神社、牟

婁ノ郡熊野速玉ノ神社、又意宇の郡韓國伊達ノ神社、名草ノ郡伊達ノ神社、大原ノ郡加多ノ神社、名草ノ郡加太ノ神社、これらみな同名なり。此レ皆右の三神の、出雲ノ國より遷り渡り坐しし時の由縁なるべし。書記に、奉_レ渡_シ於紀伊ノ國_ニとあるも、須佐之男ノ命の、三神を出雲ノ國より渡し奉りたまふなり。然後云々とあるにてしか聞ゆ。

ここで従来の歴史学・考古学等の成果を総合的に判断し、古代の渡来のプロセスを時間軸に沿った形で通時的に描いた図として次のものを挙げよう¹⁸⁾。



まず距離的に最も大陸・半島に近い北九州に向かって行われ ①

ついで出雲は北九州とは別個に「渡来人の国」を山陰に築き、その勢力を拡大していた ②

その勢力は大和にも及んでいたと考える ③

やがて出雲を傘下においた北九州勢力は大和を攻めこれを征服する ④

勢いに乗った新興勢力は矢継ぎ早に周辺部族を征服し、初期王権国家を立てる。そして未だまつろわぬ西国・東国を攻める ⑤ ⑥

今日、大和朝廷と呼ばれるこの勢力は、ほどなく全国を統一して中国に倣って律令国家を樹立する。その過程で大陸・半島から多くの人材を呼び寄

せ、国家の建設に向かう(7)¹⁹⁾

環日本海地方には、北九州・出雲よりも進んだ文化と技術が段階的に徐々に渡来したと想定される。この渡来の動きは弥生時代に本格化し古墳時代中期頃まで続いたものと考えられよう²⁰⁾。

日本神話、とりわけ『古事記』・『日本書紀』の神話体系は、出自淵源を異にする神話モチーフ、諸要素が複合・整合化され出来上がっている。すなわち、『記紀』神話は、いくつかのモチーフを素材として用いながら、その原初的意味を違え、整然とした体裁の中に自らの世界観に基づく新しい論理体系を組み立てあげた。神話とは、それを生み出した人たちの世界観のあらわれであり、神話の世界観は、原初の時に対する統一的な認識のありようを示すと言える。例えば、出雲の地は、元来、他界信仰の霊地であり、他界への入り口と信じられていた。出雲の国譲りの神話は神々の終焉を物語る説話の名残と言えるかもしれない。さらに、かの地の土俗信仰が国家神話に組み込まれた例として、神武帝の死と蘇生が挙げられる²¹⁾。かくして、環日本海の出雲は、政治的と言うより宗教的な勢力であり、呪術(シャーマニズム)的な信仰文化の中心とみなされるようになった。この関連では、『記紀』のオオナムチの医療神的性格(例：因幡の白兔)が指摘されよう。

神話の成立には確かに国家的・政治的な理念に基づく虚像によるところがあるとは言え、ある程度、民間信仰に基盤をおいている実像の部分もあると考えられる。この虚像の成立事情およびそのプロセスを解明するには、歴史学や民俗学・民族学の方法がどうしても必要である²²⁾。これまで『記紀』の出雲神話や『出雲の国風土記』は専ら文学者や民俗学者の研究対象であった。

注

- 1) 比較言語学が、サンスクリットと古典ギリシア語との比較がいわば一番の基礎になって、インド・ヨーロッパ語というもののある程度まで復元できるくらいの成果を上げたように、それと同様に、神話に関しても、インドとギリシアに最も豊富に古代の神話が残っているのであるから、インドとギリシアの神話を、ちょうど比較言語学者がサンスクリットと古典ギリシア語を対象にして行ったようにして比較すれば、インド・ヨーロッパ語族のもっていた共通の神話を復元できるという方法論。
- 2) 吉田・松村（1987:31-2）には、『神話とは人間が自分を取り囲む世界について行う思索の結晶だ』そして『「どのようにして宇宙は、人間は、文化はでき上がったのか」と「思考」することこそが、人間を他の動物つまり自然と区別し、文化の所有者である人間たらしめている』という神話の定義がある。
- 3) 吉田（1975）
- 4) デュメジル『不死の饗宴』「序論」
- 5) 柳田国男によれば、お盆の風習というのは、決して仏教ではなく、仏教以前からあるという。お盆には、祖先の霊が訪れるだけでなく、誰も祭り手のない霊もやって来る。正月も、実際は、死霊がやって来るお祭りであった。（さらに、お彼岸も含めて年4回、祖先の霊がやって来る。）
- 6) 三貴士（アマテラス・ツクヨミ・スサノヲ）の誕生および三界（高天原・葦原中国＜あしはらのなかつくに＞・根国＜ねのくに＞）分治のモチーフは、始源的には東南アジア日食神話の一亜型の日本流入の影響がある（大林1966）。二元的な発想法ではないという点において注目される。
- 7) 梅原（1985:336）
- 8) 日本神話以外にも、北欧神話、ケルト神話を参照のこと。
- 9) 梅原（1985:225）
- 10) 梅原（1985:185）
- 11) G.マレイのギリシア古典神話の研究法：ホメロスやヘシオドスらの中央伝承に登場する地名と、それに結びついた英雄の説話が、本当にその地の風土

伝承であったかどうかを検証する決め手は、同時代にできたその土地に関する風土誌類や紀行文などに、その説話の原像やその人物の聖所や遺跡が記されているかどうかにある。

- 12) 井上「邪馬台国大研究」HP: <http://www.inoues.net/yamataikoku/>
- 13) 宣長は、「熊罥（くまわに）」、「熊曾（くまそ）」という例を挙げている。
- 14) 『古事記』では、イザナミノミコトの墓所は出雲国と伯伎国（ははきのくに）との境の比婆（ひば）の山とされている。
- 15) 「花の窟」という名の由来は、増基法師が花をもって祭ったことに因るといふ。
- 16) 『古事記伝』巻十（『古事記伝』（三）岩波文庫85頁）で宣長は「木ノ國。名ノ義此字の如し。【紀伊と書クは、必二字に定むべしとの御制（みのり）に因て、紀ノ音の韻（ヒビキ）の伊（イ）を添たるなり。此例多し。】」と注釈を施している。
- 17) 『古事記伝』（三）岩波文庫86-7頁。
- 18) 井上「邪馬台国大研究」HP: <http://www.inoues.net/yamataikoku/>
- 19) 井上「邪馬台国大研究」HP: <http://www.inoues.net/yamataikoku/>
- 20) 近年、続々と発掘される環日本海地方の遺跡は、かつて出雲を中心とした王国が実在した証拠であると言えるかもしれない。北九州・畿内とは異なる、環日本海文化を共有する文化圏集団をなし、クニとしてはそれぞれ独立し王や首長のもと原始国家を形成していたと考えられる（井上）。
- 21) キリスト教の考え方との並行性も指摘される。
- 22) 松前（1976:3-4）：「虚像の成立を、ただ少数の中央貴族たちの作為に基づく」と説くとか、またさらに焦点を絞って、奈良時代前後のころの、二、三の特定人物の創作に帰するとか、あまりに安直、かつ証拠不十分な解釈で、さっさと片づけてしまうのは危険である」。

参考文献

梅原 猛（1985）『神々の流鼠』集英社文庫

- 大林太良（1966）『神話学入門』中公新書
倉野憲司 校注（1963）『古事記』岩波文庫
松前 健（1976）『出雲神話』講談社現代新書
松村一男（1999）『神話学講義』角川書店
三浦佑之（2003）『古事記講義』文藝春秋
吉田敦彦（1975）『比較神話学の現在』朝日出版社
吉田敦彦・松村一男（1987）『神話学とは何か』有斐閣
柳田国男（1910）『遠野物語』聚精堂
デュメジル, G.（松村一男訳）（1987）『神々の構造—印欧語族三区分イデオロギー—』国文社
リトルトン, C. S.（堀美佐子訳）（1981）『新比較神話学』みすず書房